OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	子宮癌をめぐる最近の話題から
Author(s)	早川, 謙一
Citation	癌と人. 1978, 6, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24168
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

子宮癌をめぐる最近の話題から

評議員　早　川　謙　一*

社会，経済的環境の変化に伴い，その環境のもとにある人間の疾病構造も当然のことながら変化することは周知の事実である。

私共の取り組んでいる“癌”といういまわしい病気も生活環境の影響下に発生が促進あるいは抑制されるもの，また医学的進歩による早期診断や治療が確立されていくものなどの理由により癌の仲間でも時代によりその構成に変化がみられることは，田口教授が先号の本誌に述べられた通りである。

私共が取り組んでいる婦人科領域のうちでも特に子宮癌に関して，時代を反映する様々な話題が提供されているので最近の子宮癌に関する話題を少し解説してみたいと思う。

—子宮体癌の増加—

御存知の通り子宮癌には，子宮の入口に発生する子宮頚部癌（頚癌）と子宮体部癌（体癌）があり，日本人においては，子宮癌のうち95%が子宮頚癌であり，子宮体癌は５%前後にすぎないとされてきた。

しかしながら，この数年，この発生比率に変化が表われ，子宮内膜より発生する体癌の比率が徐々に大きくなり，欧米白人婦人の発生率に似た傾向を示すことが報告されている。この原因は，疫学的に高血圧，肥満，糖尿病を合併することが多く，未経妊婦人や月経不順であった婦人に多く発生すること，また長期の卵胞ホルモン剤（エストロゲン）服用者に発生率が高く

図１　体癌の頻度の年次別推移（東大）

表１　体癌と個人的素因

	独身・未産	閉経遅延	肥満	高血圧	糖尿病	遺伝	重復癌
Fox（1970）	＋	＋	－	＋	＋		
Brown（1974）	＋	＋	－	－	－	－	
Mac Mahon（1974）	＋	＋	＋	－？	＋	－	＋
東京癌研（1970）	＋	－	±	－	＋	＋	＋
東大（1974）	＋	－	＋	＋	＋		？
阪大（1977）	＋	＋	＋	＋	＋	？	？

＋素因あり
－素因なし

* 大阪大学講師（微生物病研究所附属病院婦人科長）

なることから，内分泌変調をきたしやすい因子（これをハイリスク因子という）が問題となり，これらの因子はすべて我々の文明の発達に伴う環境の変化により多くなることを示している。

一方，子宮頚癌は従来から，多経妊，多経産婦人に好発し，疫学的に低所得者層に多く，また性交により発癌因子が膣内に導入される可能性があることや，初交年令が低い群ほど発生率が高いことが示唆されている。

主として，米国の統計では，最近若年者層の子宮頚部前癌状態の患者が増加しており，これは社会的に性の解放がすすみ，初交年令が低下し，一方複数の異性と接触する機会が増加している為と解釈されている。

一方日本では，癌検診の普及により，首都圏及び主要都市部では，早期発見による比較的若年者の早期癌と老年層の進行期癌の二極化が著しい。

—頚癌とvirus —

この様な頚癌の疫学的，統計的調査からヘルペスウイルスの感染との関連が示唆されている。欧米及び日本の最近の報告で，頚癌患者の血清中に高率にヘルペスウイルスの抗体が証明され，このウイルスに感染した婦人を追跡すると，子宮頚癌発生の頻度が有意に高く，頚癌婦人の夫の恥垢からヘルペスウイルスを分離することが出来るなどの発表がみられる。

頚癌の発生に関して膣内環境における発癌因子の存在の可能性が認められ，特に性交により発癌因子が膣内に導入される性病的性格が指摘されているが，このヘルペスウイルスも不潔な性交により伝播する一種の性病的性格を有しており，いずれもヘルペスウイルスが子宮頚癌の発生に関連していることが強く示唆されている。

また，最近このヘルペス感染が女性の内分泌環境（性周期，妊娠等）により増強されたり，抑制されたりすることを阪大微研西浦が発表し，この分野における注目を集めている。

近年virusの発癌に果す役割が重要視されて久しいが，いくつかの動物の腫瘍がvirusにより発生することは確定しているが，ヒトの癌の発生因子として確定したvirusはないが，強くその関連性を疑われているものとして鼻咽頭癌のEB virus，肝癌におけるHB-antigenがあり，これらは広範な疫学，病理，臨床，免疫学的な国際的共同研究が行なわれているが，子宮頚癌とヘルペスウイルスの臨床的基礎的な研究の組織化がおこなわれることが必要である。

しかし，このまま検診システムが整備され癌検診の啓蒙が普及すれば極く近い将来，子宮頚癌は，その初期段階で，完全に処理（治療）され，この癌による死亡が激減することは目前である。